

# 介護福祉士を目指す学生の高齢者像（1）

—実習経験との関連性について—

## Student Care Worker Applicants Image of the Elderly. 1

—How it Relates to Practical Care Training—

天野 由以

(Yui AMANO)

### I. はじめに

近年、高齢者を既存の高齢者像（高齢者イメージ）にとらわれない「従来の「支えられる高齢者」というイメージとは違う新しい「支える高齢者」<sup>1)</sup>へ、という意識の変革が求められている。この意識の変革は、2015年には団塊世代の全てが65歳以上となり、高齢化率26.0%を越える<sup>2)</sup>前例のない高齢社会の到来を控え、彼らを対象とした新たな商品開発の可能性を喚起し、また少子化に伴う労働力不足の補完と高齢者の生きがい対策という、二つの側面を有した「高齢者のマンパワーの活用は前例のない高齢社会を活力ある物にするためには必要不可欠である<sup>3)</sup>」との期待を孕んでいるものと思われる。

『厚生白書（平成12年版）』は副題を「新しい高齢者像を求めて—21世紀の高齢社会を迎えるにあたって—」とし、21世紀が「高齢者の世紀<sup>4)</sup>」であり「高齢者を多様な人生経験と価値観を持つ世代の集まりである<sup>5)</sup>」と位置づけ「高齢者を社会的・経済的弱者として画一的にとらえる」通念を払拭し「長年にわたって知識、経験、技能を培い豊かな能力と意欲を持つもの<sup>6)</sup>」として捉えることが活力ある高齢社会につながるとしている。また『厚生労働白書（平成15年版）』の副題は「活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築」であり、『高齢社会白書（平成19年版）』では「「65歳」＝「高齢者」＝「支えられる人」という固定観念を捨てること<sup>7)</sup>」という項目で「「65歳以上は高齢者で支えられ手である」という固定観念は、高齢者の実態にも高齢者の意識・意欲にもそぐわない考え方である。<sup>8)</sup>」と述べている。マスメディアでも、サクセフル・エイジング、アクティブ・シニア、新老人などいきいきと老後の生活を営む新しい高齢者像を示す言葉や概念が紹介されるようになってきた。例えば高齢者が鉄棒の大回転をするカード会社のCM<sup>9)</sup>や、引きこもりがちの車いす生活を送る高齢者が、福祉車両を借りることで革ジャンを身にまとい再びライブハウスの舞台上に上がるというレンタカー会社のCM<sup>10)</sup>などはその一例であるが、そのように描き出される新しい高齢者像が社会一般に十分に浸透しているとは言い難い。

高齢者を支援する立場にある社会福祉実践者のエイジズムについて鳥羽<sup>11)</sup>は、高齢者デイサービスへの勤務経験と先行研究の整理から、専門職養成校を卒業後、福祉の現場で要介護高

齢者と接する環境におかれた専門職が、偏見を持たずに相手を受容するということを頭では理解していても「業務において障害高齢者と日常的に関わることで、否定的イメージが強化され、高齢者の多様性や、高齢者の持っている能力を過小評価してしまう傾向は否めない<sup>12)</sup>」困難な状況にある事を指摘している。それ故に福祉専門職養成教育において「「健康な高齢者像」,「高齢者の多様性」といった高齢者のポジティブな側面における知識や体験を増やすことができるような内容をより多く盛り込む必要がある<sup>13)</sup>」という課題を示唆している。

本稿は、2007年度に目白大学短期大学部生活科学科に新設された生活福祉コース（以下、本コースとする）において、介護福祉士を志す学生が持っている高齢者像の把握を行うとともに、その成立の背景について明らかにする。このことは、本コースにおける、幅広い視野で多角的に高齢者を捉える能力を身につけ、今後の高齢社会における複雑なニーズに対応できる介護福祉士の養成教育を行うための基礎資料となり得よう。

教育現場における高齢者像についての研究には、発達段階・学齢に応じ、「子ども・児童<sup>14)</sup>」,「幼児<sup>15)</sup>」,「小学生・中学生<sup>16)</sup>」,「高校生<sup>17)</sup>」,「大学生<sup>18)</sup>」を調査対象として福祉教育・家庭科教育などの観点で行われた研究と、「看護学生<sup>19)</sup>」,「社会福祉学専攻学生<sup>20)</sup>」,「介護福祉士養成課程在学学生<sup>21)</sup>」,「歯科衛生士学生<sup>22)</sup>」らを対象に実習前後、学年進度、高齢者疑似体験をカリキュラムに取り入れたことなどによる高齢者像の変化について行われた、専門職養成課程における学生の傾向やカリキュラム上の課題を明らかにするための研究に大別できる。

看護師を目指す学生を持つ高齢者像とその成立に影響を与えた要因について滝川ら（1999）<sup>23)</sup> 河野ら（2001）<sup>24)</sup> の調査では「外見・運動面・活動面・生理的変化」では否定的イメージを持ち、「性格・能力」面では肯定的イメージを持つ傾向にあり、また、高齢者像を規定する要因は高齢者との接触体験と高齢者についての学習経験であるという傾向が見られた。実習前後を比較すると野村ら<sup>25)</sup> の調査では実習経験が増えることにより高齢者と接する機会が増え、入学時より実習経験後の方がイメージが肯定的に変化しているが、瀬戸ら<sup>26)</sup> の調査では、施設に入居して生活する高齢者のイメージについて、介護実習第Ⅰ段階と第Ⅱ段階を比較して実習経験が増えるほどマイナスイメージに変化しているという肯定的・否定的両方の変化が見られている。

これらの結果が示すように、先行研究の調査内容には共通性を見いだせない結果も多く、志望動機や入学当時の高齢者像の成立に影響を与えたのが、祖父母との同居なのか、高齢者との接触体験なのか、同居率の高さなどは地域によって格差が存在し、一つの研究成果が全ての研究成果と同じ傾向を示すとは言い難く、さらなる事例研究の蓄積が必要であろう。そこで本稿では先行研究の裏付けを参考にしつつ、本学学生の高齢者像とその成立に影響を与えた要因について調査結果を分析し、明らかにする。

## Ⅱ. 調査の概要と結果

### 1. 調査の概要

上記目的のため、目白大学短期大学部生活科学科生活福祉コースに在籍する2007年度入学生20名を対象にアンケート調査を行った。アンケートは、2007年4月および10月に、それぞれ「介護技術Ⅰ」、「障害形態別介護技術Ⅰ」の講義時間中に質問紙を配布し記入・回答を求めた。本稿では2回とも回答の得られた18名の回答を分析の対象とする。4月の調査では表1に示す各項目について質問を行った。10月の調査では、「The Fact of Aging Quizzes」（老化についてのクイズ）<sup>27)</sup>を元に筆者が手を加えたものを使用した（表2）。回答者18名は18～19歳の未成年女性のみで構成され、その出身地（人数）は、青森県（1）・茨城県（1）・埼玉県（2）・千葉県（1）・東京都（10）・神奈川県（2）・鹿児島県（1）の各都県にまたがる。

この回答を単純集計し、同居経験、入学前の施設訪問経験の有無、施設訪問の体験時期、高齢者の年齢、高齢者が歳を取ったと感じる理由、理想の高齢者像の各項目の回答との相関について分析した。

表1. アンケート質問項目

カテゴリー	質問項目	相関項目
高齢者との交流体験	入学前の福祉施設体験学習経験の有無	※
	参加時期	※
	参加動機	※
	施設種別	
	体験学習参加経験の進路選択への影響の有無	
	祖父母との同居経験の有無	※
	祖父母の状況	※
	祖父母と合う頻度	※
高齢者・高齢社会のイメージ	高齢者とは何歳以上の人だと考えるか	※
	高齢者が一番最初に「年を取った」と感じるのはどのような時か	※
	自身の「高齢者」イメージの元は誰か	
	理想とする高齢者像の有無、その具体例	※
	日常生活の中で高齢者差別を感じた経験の有無	
	今の社会が高齢者にとって生活しやすい社会だと思うか、その理由	

※印の項目は高齢者像と老化についてのクイズの正答率に影響があるものと仮定し、各回答との相関を見た項目である。

表2. 「老化についてのクイズ」の質問項目と生活福祉コース1年生への調査結果

偏見	質問項目	正誤	生活福祉コース学生 N = 18, 正答数 (%)
N	1. 高齢者 (65歳以上) の大多数はぼけている。(記憶力が衰え、周囲の人や出来事・時間など正しい判断ができなくなり、認知症になっている)。	誤	88.9
P	2. 高齢になると五感 (視覚, 聴覚, 味覚, 触覚, 嗅覚) のすべてが衰えがちになる。	正	77.8
	3. 大多数の高齢者は性行為に関心がないか, 性的不能である。	誤	66.7
P	4. 高齢になるとつれ, 肺活量は低下する傾向がある。	正	94.4
	5. 高齢者の大多数はほとんどいつも惨めだと感じている。	誤	77.8
P	6. 体力は高齢になると衰えがちである。	正	94.4
N	7. 高齢者の10人に1人以上が長期ケア施設 (ナーシングホーム, 精神病院, 老人ホームなど) で暮らしている。	誤	11.1
	8. 高齢のドライバーが事故を起こす割合は65歳未満のドライバーより低い。	正	44.4
	9. 中高年労働者は一般に若い労働者より仕事の能率が劣る。	誤	50.0
	10. 高齢者の4人に3人以上は人の手を借りなくても普通の活動をこなせるほど健康である。	正	27.8
N	11. 高齢者の大多数は変化に適応できない。	誤	33.3
P	12. 高齢者は一般に新しいことを習うのに若い人より時間がかかる。	正	88.9
N	13. 高齢者は若い人より鬱状態になりやすい。	誤	44.4
P	14. 高齢者は若い人より反応が遅い。	正	88.9
	15. 総じて, 高齢者は似たり寄ったりである。	誤	77.8
	16. 高齢者の大多数は退屈など減多にしない。	正	5.6
N	17. 高齢者の大多数は社会的に孤立している。	誤	22.2
	18. 今では人口の20%以上が65歳以上である。	正	68.4
	19. 大多数の高齢者の所得は貧困ライン (連邦政府の規定による) 以下である。	誤	55.5
	20. 高齢者のほとんどは何らかの仕事をしているか, したいと思っている (家事やボランティア活動を含め)。	正	正
	21. 高齢者は年とともに信心深くなる。	誤	16.7
	22. 大多数の高齢者は, 自分は苛立ったり, 怒ったりすることは減多にないと言う。	正	38.9
	23. 高齢者の健康状態と経済的地位は2010年には (若い人々と比べて) ほぼ同じか悪化している。	誤	22.2

質問項目の左にPがついている質問は, 肯定的偏見, Nがついている質問は否定的偏見を見る項目である。  
正答数の平均値: 57.9%

## 2. 高齢者との関わり経験と進路への影響

回答を得られた18名の内, 12名 (66.7%) が大学入学前の小学校から高等学校在籍中に福祉施設訪問体験を有していることが明らかになった (表3)。訪問経験の有無とその他の回答の相関は見られなかった。

一番最初の訪問時期は小学校3年生から高校3年生までの差が見られたが, 訪問時期の差は高齢者像, 老化に関するクイズの正答率との相関は見られなかった。施設訪問の理由・動機に

については9名（75.0%）が学校の行事あるいは授業の一環や宿題として課せられた為としており、自身の興味関心からの訪問は2名（16.7%）にとどまった（表4）。

訪問した施設種別については障害福祉施設1名（8.3%）、高齢者福祉施設11名（91.2%）と、特別養護老人ホームや高齢者デイサービスセンターでの体験が中心となっている。

また、この時の経験が現在の進路選択（介護福祉士養成課程への進学）に影響していると回答した学生が11名（91.7%）と高い割合を示した（表5）。

表3. 生活福祉コース1年生の大学入学以前の福祉施設訪問経験

訪問経験有り	12 (66.7%)
訪問経験無し	6 (33.3%)

表4. 訪問の理由・動機（N=12）

学校行事、授業の一環・宿題	9 (75.0%)
興味があった・ボランティアで	2 (16.7%)
子ども会活動で	1 (8.3%)

表5. 施設訪問経験の進路選択への影響（N=12）

影響があると思う	11 (91.7%)
影響があると思わない	1 (8.3%)

祖父母との同居経験が有る学生は5名（27.8%）と学生全体に対しては少なく感じる割合だが、（表6）これは平成17年度国勢調査（要計表による人口）から算定される三世同居率全国平均8.6%の3倍にあたる<sup>28)</sup>。祖父母の平均年齢は77.4歳（表7）と後期高齢者の割合が高く、すでに死別している割合も多く見られたが、健在の場合でも要介護状態である率は9.8%と低く、現在も交流のある祖父母の9割が元気であることが分かった。同居経験の有無もその他の回答との相関は見られなかった。

表6. 祖父母との同居経験

同居経験有り	5 (27.8%)
同居経験無し	13 (72.2%)

表7. 祖父母の状況・会う頻度

	平均年齢 (死別・不明は除く) ※	現在の状況			会う頻度			
		元気	入院・ 要介護	死別	毎日～ 月に 1回	2ヶ月～ 半年に 1回	年1回～ 2年に 1回	無回答
母方の祖母	76.4	13(72.2%)	2(11.1%)	3(16.7%)	6	4	2	1
母方の祖父	76.0	9(50.0%)	1(5.6%)	8(44.4%)	4	4	1	0
父方の祖母	79.4	10(52.6%)	1(5.3%)	7(42.1%)	2	4	4	0
父方の祖父	78.0	5(27.8%)	0	13(72.2%)	0	2	2	1

※最若年は66歳，最高齢は89歳で共に母方の祖母であった。

### 3. 「高齢者像」とその成立に影響を与えたと考えられる要因

高齢者とは何歳以上の人だと考えるか，という問いに半数以上が「65歳以上」と回答している（表8）。また，高齢者が一番最初に「年を取った」と感じるのはどのような時かという問いには「体力の衰え」と「外見の変化（皺，白髪など）」に回答が集中している（表9）。この項目も他の回答との相関は見られなかった。

表8. 高齢者は何歳からだと思うか

60歳以上	3
65歳以上	10
70歳以上	2
年齢では分けられない	3

表9. 高齢者が一番最初に「年を取った」と感じるのはどのような時だと思うか

年金をもらうようになった	3
孫が生まれた	0
体力の衰えを感じた	7
外見が変わった（白髪・しわなど）	4
節目の年（還暦など）を迎えた	1
電車などで席を譲られた	3

高齢者像の元となったのは誰かという問いについては「自分の祖父母」という回答が77.8%と圧倒的に多く，自分の祖父母が年齢を重ねる毎に体力的に衰え，外見が変化してきた様子を目の当たりにすることが，この時点での学生の高齢者像に影響していることが分かる（表10）。

理想とする高齢者像の有無について「有る」と回答したのは35.0%と回答率こそ低いもので

あったが、その内容は元気で明るく家族や友人に囲まれている、学生達の祖父母の姿を彷彿とさせるものがあり、また高齢になっても活躍する芸能人の姿が影響を与えていることが示されている（表11）。

表10. あなたの「高齢者イメージ」の元となっているのは

自分の祖父母	14
その他※	4

※「その他」自由記述解答  
 福祉施設にいる利用者  
 世の中の定年を迎えている人達  
 街で見えるおじいちゃんおばあちゃん  
 アニメやテレビなど

表11. 理想とする高齢者（自由記述）

明るくいたい
いつまでも元気、ずっと家で暮らして孫を可愛がる
おしゃれをちゃんとしている
歳を感じさせないパワーを持った人
その年齢の自分を楽しむ
家族や親せきみんなに好かれていて老人会とかにも参加して友達一杯作ってゲートボールとかしたい
朗らかで明るい、森光子さんのように元気

#### 4. 現代の高齢社会をどのようにとらえているか

日常生活の中で「高齢者に対する差別」を感じたことがあると回答した学生は40.0%であるが、具体例を挙げることが出来た学生は全体の30.0%で、その内容は「定年で働ける年齢に制限がある」「動作の遅い高齢者への蔑視」「高齢者だから分からないだろうと決めつける」という否定的差別に偏り、肯定的差別の回答は見られなかった。

今の社会が高齢者にとって「生活しやすい社会」だと思うか、という問いには70.0%の学生が「生活しやすいとは思わない」と回答している。具体例として「バリアフリーの不備」が最も多く、次いで「年金問題」「優先席に若者が座っている」等が挙げられた。

#### 5. 老化についての知識

表2. 「老化についてのクイズ」は「障害形態別介護技術Ⅰ」において「老化」についての講義を行う前に実施した。実態に即していない質問（問18の正答はが原典では「誤り」であるが平成19年9月現在日本の高齢化率は21.5%と20%を越えているため<sup>29)</sup> 正解とした）、判断が困難だと判断したもの<sup>30)</sup>を除くなど筆者が手を加えている。

本稿の回答結果は先行研究<sup>31)</sup>における正答率の低い問題と同様の傾向を示しているが、この回答が示す高齢者像は、4月の時点で学生が持っていた高齢者像の元となる「健康」な祖父母のイメージとは、大きな隔たりが有るように思われる。

本コースでは6月初旬に第I段階介護実習を実施し、この調査は学生は特別養護老人ホームや介護老人保健施設での12日間の介護実習を間に挟んで実施された。実習施設で学生が出会った高齢者は「長期ケア施設で生活する」「人の手を借りなくても普通の活動をこなせるほど健康」ではなく、「退屈」し、「社会的に孤立」した「信心深い」様子をしていて、このままでは「2010年には健康状態と経済的地位が悪化する」と思わせられるような状況であったのだろうと推測される。

このクイズの正答率も、他の回答との相関は認められなかった。回答した全学生に共通している体験は「介護実習」である。

先行研究においても実習を経験した学生の高齢者像は実習前と変化する傾向にあり、実習時の経験がこの調査の回答に影響していることが、正答率の低い問題群から見えてきている。すべての回答に実習が影響を与えているとは言い切れないが、否定的な高齢者像を規定した要因として大きな影響を与えた事は否めない。

### Ⅲ. 考察

#### 1. 本学本コースを選択した学生の傾向

本稿において本コースの学生の介護福祉士養成課程への進路選択には

- ・ 高校生までの福祉施設訪問経験
- ・ 祖父母との同居

などの要因が影響を与えていることが明らかになった。

現在交流がある祖父母の状況は9割が健康であり、学生の高齢者像の元となっているのは祖父母である、との回答があったにも関わらず、実習後の調査では高齢者を「社会から否定的に扱われている」「今の社会では生活しづらい」「10人に1人は長期ケア施設で生活する」「人の手を借りなくても普通の活動をこなせるほど健康ではない」「退屈」し、「社会的に孤立」した「信心深い」存在として理解している傾向があることが明らかになった。

今後の介護福祉士養成課程において学生が学ぶのは「要介護状態にいる高齢者」の生活支援についてであり、高齢者の身体特性や心理、精神状態についての理解を深めることは、すべてのケアにつながる重要な課題である。残り8週間以上の介護実習では入居施設や在宅で訪問介護を受ける高齢者と関わる事が中心になる。知識として「高齢者の10人に1人以上が長期ケア施設に入居」していないことを理解したとしても、実際に関わる高齢者が「長期ケア施設に入居」している高齢者という狭い範囲に限定されては、「65歳」＝「高齢者」＝「支えられる人」という固定観念を捨てること」が困難であることは、本稿の結果からも容易に予測できる。



## 2. 固定観念から解き放たれた高齢者像を築くために

筆者がかつて介護職員として勤務していた都内高齢者福祉施設では、保育園から高校生までの体験学習の受け入れを行っており、1995（平成7）年～2002（平成14）年の期間受け入れ担当者として、学生を送り出す側との折衝を重ねてきた。高齢者福祉施設において行われる体験学習や交流体験は、良くも悪くも高齢者像を変化させる可能性を持っている。しかし、どのような要素が良い変化を生じさせるかについてはまだ、明らかにすることができていない。高齢者福祉施設において行われる体験学習や交流体験は将来の超高齢社会の担い手となる可能性を秘めた児童・生徒に「高齢社会」「介護」の現実に触れさせ、意識させることも目的の一つなのであろうと理解していたが、主たる目的は高齢者とのふれあいを通して、自らが起こしたアクションを喜んで受け入れてくれる人がいる、という成功経験から自己肯定感を高める事であり、その経験が高齢者への思いやり行動につながる、と言われれば受け入れ側としては体験学習を断ることは難しかった。その一方で、車いすに乗り、あるいは認知症の症状から子どもにとっては奇異に映る行動を取り介護職のケアを受ける要介護高齢者の姿は、「高齢者」＝「支えられる人」という固定観念を子ども達の心に強烈な印象を持って刷り込んではいないだろうか、という不安が常にあった。高齢者との接触経験が少ない子ども達にとって要介護高齢者との関わりも重要な体験である。しかし、要介護状態ではない高齢者との関わりの機会も子ども達、そして介護福祉士を目指す学生には必要なのではないだろうか。

アンケートに回答を得られた学生の約7割が大学への進路選択期以前に福祉施設訪問の体験を有しており、内8割が介護福祉士を目指すという進路選択に影響を与えたと思う、と回答した。高齢者を「社会から否定的に扱われている」「今の社会では生活しづらい」「10人に1人は長期ケア施設で生活する」「人の手を借りなくても普通の活動をこなせるほど健康ではない」「退屈」し、「社会的に孤立」した「信心深い」存在として理解している傾向があるという事実は、本学の学生については高齢者福祉施設での高齢者との交流（介護実習も含む）が高齢者への「支えられる人」というイメージを強化していると言えよう。

では、学生をその固定観念から解き放つために、これからの養成教育で出来ることは何か。

高齢社会白書（平成19年版）では、団塊の世代に代表される戦後生まれが高齢期を迎える事で「前例のない可能性を秘めた高齢者」が数多く出現することを予測している。

平成18年9月現在、介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）入居者数は393,451人、介護老人保健施設入居者数は279,684人と合わせて673,135人<sup>32)</sup>という数値は、平成18年10月現在の65歳以上の高齢者人口2,660万人に対して2.5%にすぎない。その事実を伝えること、その事実から残りの97.5%の高齢者への興味関心を持てるような機会を作ること、97.5%の高齢者と関わるために必要な事は何かを考える能力を身につけたいという意欲を持たせること。その様な目標が達成できる本学独自の取り組みを実現する事が可能となれば、介護福祉士養成という狭い枠組みを越えて、これからの高齢社会を担う「新しい可能性を秘めた高齢者」と向き合うこ

との出来る社会人を輩出することが出来るだろう。

滝川ら (1999)<sup>33)</sup> 河野ら (2001)<sup>34)</sup> の先行研究において、講義や読書による高齢者に関する知識を学ぶこと、健康で自立した生活を送る高齢者との関わりが学生の高齢者像を肯定的なものに変化させるという結果が出ているが、本コースにも同様の結果を生じさせるためには新たな取り組みが必要である。今後考えられる取り組みとして、大学周辺地域で生活する高齢者との交流会、高齢者が数多く集い賑わうことで有名な巢鴨地蔵通り商店街などでのフィールドワーク、本コースの開講科目の一部を高齢者生涯学習講座等の企画に開放し、学生と高齢者受講生とが同席する機会を設ける、などが考えられるが、SPIS制度などを活用し学生が主体となって97.5%の高齢者と関わる機会を他学科、他学部とも協力して実施できるような支援体制が出来ることを希望する。

また学生の高齢者像とその背景、進路選択への影響などについての調査研究は今後も継続し、入学時、実習終了時、進路選択時、卒業後と縦断的研究をしていく必要があると考える。

#### IV. おわりに

はじめに、で述べたように介護福祉士を目指す学生達の高齢者像とその成立に影響を与えた背景、高齢者像を変容させる要因についての研究は、教育学や看護学の先行研究に比較して事例の蓄積が不足している。本稿は、目白大学短期大学部生活科学科生活福祉コースにおける介護福祉士養成教育と学生の高齢者像の関連研究の初歩にすぎず、さらなる事例研究の蓄積が必要であろう。また、本学学生の高齢者像とその成立に影響を与えた要因について、介護実習の影響が否定できないと考えるが、本稿では解決できていない問題点として、学生が実習施設でどのような体験をしてきたのか個別の経験が高齢者像に結び付く可能性について触れていない。また、祖父母と要介護高齢者を同じ高齢者として認識しているのか、認知症高齢者との関わりが深かった学生と関わりが浅かった学生の違い、第I、第II段階実習を経てどのような変化があるか、講義や演習内容の検討など検証すべき点は枚挙に暇がない。先行研究で取り上げられているSD法や自由記述の分析、KJ法的手法を用いた発想法、グループインタビューなど学生の持つ高齢者像をより明確化するための調査・分析方法の検討についても本稿では不十分であった。以上は次稿以後の研究課題として、研鑽に努めたい。

【註】

- 1) 内閣府『高齢社会白書（平成19年版）』p.65.
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成14年1月推計）」による
- 3) 前掲 註1) p.66.
- 4) 厚生省監修『厚生白書（平成12年版）新しい高齢者像を求めて—21世紀の高齢社会を迎えるにあたって—』p.6.
- 5) 前掲 註1) pp.8-9.
- 6) 前掲 註1) pp.158-159.
- 7) 前掲 註1) p.66.
- 8) 前掲 註4)
- 9) クレディセゾン社，2004年～2005年，放映。
- 10) トヨタレンタリース社，2006年，放映。
- 11) 鳥羽美香（2005）「エイジズムと社会福祉実践—専門職の高齢者観と実践への影響—」文京学院大学研究紀要 Vol. 7 No. 1, pp.89-100.
- 12) 前掲 註11) p.98.
- 13) 前掲 註11) p.99.
- 14) 深谷和子・山上和子（1982）「子どもの老人観（I）—祖父の場合を手がかりとして—」東京学芸大学紀要1部門 33, pp.229-241.
- 15) 吉村智恵子・望月久乃（1991）「幼児の老人観（1）—特に祖母イメージについて—」名古屋女子大学紀要37（人・社），pp.105-114.
- 16) 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明（1993）「中学生の老人観—老人観スケールによる測定—」社会老年学No.38, pp.3-12.
- 17) 水戸美津子・西脇洋子（1998）「高校生が抱く老人像に影響する要因に関する調査研究—普通科・福祉科に学ぶ高校生を対象として—」学校教育研究13, pp.170-185.
- 18) 保坂久美子・袖井孝子（1988）「大学生の老人イメージ—SD法による分析—」社会老年学No.27, pp.22-33.
- 19) 滝川由美子・吉本知恵・横川絹恵（1999）「看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較—」香川県立医療短期大学紀要第1巻, pp.51-60., 鈴木みちえ・山本よしゑ（2000）「学年進度からみた学生が抱く老年イメージの縦断的变化に関する調査—本学における老年看護学の教授学習過程とその影響—」聖隷学園浜松衛生短期大学紀要第23号, pp.76-85（2000）., 河野由美・細田江美（2001）「看護学生の高齢者イメージに関する縦断的研究」飯田女子短期大学看護学科年報第4号, pp.1-12., 生野繁子・西崎緑・加藤麻樹（1999）「老人観についての調査（1）九州看護福祉大学第一期生の老人イメージ」九州看護福祉大学紀要Vol. 1, No. 1, pp.215-231.
- 20) 南彩子（2004）「エイジズム：その意味と大学生への調査に見る高齢者差別意識」天理大学人権問題研究室紀要第7号 pp.1-14.
- 21) 岩月宏泰・生田泰敏・岩月順子（1999）「介護福祉学生における老人イメージの要因分析」月刊総合ケア9（9）（通号105）pp.66-68.  
澁谷正子（1999）「介護福祉学科生の「老人のイメージ」と「老後観」」日本赤十字秋田短期大学紀要4 pp.73-79.  
大宮チズ子・松本暁子・岡村ヒロ子・北村郁子（2001）「介護学生が抱く高齢者のイメージとその要因」大阪薫英女子短期大学研究紀要35 pp.25-32.  
野村和子・小西睦子・渡辺きよみ（2003）「介護学生の高齢者に対するイメージの変化（〈特集〉高齢者）」大阪ソーシャルサービス研究Vol. 3 pp.25-37.  
瀬戸雅子・大根静香・石井紀子（2004）「介護福祉学科生の入学時の意識—介護に対する職業観と高齢者に対するイメージ—」研究紀要 短期大学部37 pp.23-29.  
瀬戸雅子・大根静香・石井紀子（2005）「介護福祉学科生の高齢者に対するイメージと職業観—入学

- 時と実習経験後の比較―」研究紀要 短期大学部38 pp.1-5.
- 22) 嶋野浪江 (1996)「高齢者に対する歯科衛生士学生のイメージ―特別養護老人ホーム研修による変化―」湘南短期大学紀要Vol.7, pp.179-184.
- 23) 前掲 滝川論文 註19)
- 24) 前掲 河野論文 註21)
- 25) 前掲 野村論文 註21)
- 26) 前掲 瀬戸論文 註21)
- 27) アードマン・B・パルモア著・鈴木研一訳 (2002)『エイジズム 高齢者差別の実相と克服の展望』明石書店, 422p.
- 28) 生活福祉コースに在籍する学生の出身都県(東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県・茨城県・青森県・鹿児島県)のうち青森県を除く4都県は全国平均よりもさらに同居率が低く、青森県を含めた出身都県の平均値10.1%と比較しても高いことが分かる。
- 29) 総務省統計局の推計人口発表によれば、平成19(2007)年9月15日現在の高齢者(65歳以上)人口は2744万人と総人口の21.5%を占め、過去最高水準を更新し続けている。
- 30) 今回削除したのは以下の二問である「中高年労働者は若い労働者より事故に遭う率が低い。」「医療従事者の大半は高齢者を後回しにする傾向がある。」
- 31) 前掲 註20)
- 32) 厚生労働省HP「平成18年介護サービス施設・事業所調査結果速報数値」より。(http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/kaigo06/index.html, 2007年10月4日閲覧)
- 33) 前掲 滝川論文 註19)
- 34) 前掲 河野論文 註21)